

## 1:25,000 活断層図 山田断層帯とその周辺

## 「宮津」 解説

山田断層帯は、京都府北部の丹後半島基部に分布する断層帯で、山田断層帯主部と郷村断層帯に区分される。山田断層帯主部は、京都府宮津市北部から与謝郡与謝野町字岩滝、同町四辻を経て、兵庫県豊岡市但東町に至る全長約 33 km の断層帯である。郷村断層帯は、京都府京丹后市網野町沿岸から同市大宮町口大野付近に至る全長約 13 km（陸域）の断層帯とされている（地震調査研究推進本部地震調査委員会，2004）。本図には、山田断層帯を構成する山田断層北東部、郷村断層帯をはじめとして、三重断層、須津峠断層、弥助山西断層、中山断層のほか、複数の推定活断層が記載されている。

本図における山田断層は、宮津市日置付近から与謝野町上山田の西方まで全体的に東北東－南南西方向に延びる長さ約 18 km の右横ずれを主体とした北西側隆起（南東落）の変位を伴う断層で、東北東に延びる山地と低地（東部は阿蘇海、宮津湾）の境界断層として認められる。日置周辺の山地から低地側へ張り出すように発達する扇状地上、府中駅周辺の下位段丘面および扇状地上、与謝野町宇弓木周辺の下位段丘面および扇状地上、下山田・上山田周辺の扇状地上にはそれらの扇状地を変位基準とする確実な低断層崖が認められ、上山田から岩屋にかけては山地から低地に流下する河川の右横ずれが系統的に分布する。

三重断層は、宮津市大宮町延利付近から与謝野町上山田付近まで、北北東－南南西方向に延びる長さ約 7 km の北西側隆起（南東落）の変位を伴う断層である。山地内の竹野川に沿って北東方向の細長い低地が分布し、その西縁に断続的に確実な東落の低断層崖が三重付近の下位段丘面および扇状地上に認められる。竹野川の出口が低地の走向と直角に曲がり山地内を先行谷として横断することから西側隆起を示唆し、低断層崖の変位様式と整合的である。南端部の山地内には河川の右横ずれ変位も認められる。

須津峠断層は、宮津市須津から須津峠を越えて同市杉末付近まで東西に延びる長さ約 2 km の断層で、天橋立の南端部をなす妙見山内を東西に走る断層谷として認められる。特に西半部において二本の河道の切断と屈曲が顕著であり、確実な活断層と認定した。

弥助山西断層は、宮津市奥波見から同市日置付近まで南北に延びる長さ約 3 km の全体的に西側隆起（東落）の変位を伴う断層である。世屋川左岸に発達する上位段丘面に、東落の断層崖由来の斜面が認められる。それらは傾斜変換部としての斜面の一部であり断層崖としての形状は鮮明ではないため、位置やや不明確（赤破線）の活断層とした。なお弥助山西断層は、地震調査研究推進本部地震調査委員会（2004）では、弥助山西の断層と称されているが、本図では、新編日本の活断層（活断層研究会編，1991）、近畿の活断層（岡

田・東郷編, 2000) で使われている弥助山西断層を表記した。弥助山西断層は、山田断層と共に山田断層帯主部を構成する断層とされている(地震調査研究推進本部地震調査委員会, 2004)。

中山断層は、京丹後市吉野付近から同市弥栄町黒部まで、ほぼ東西方向に延びる長さ約 6 km の右横ずれの変位を伴う断層で、西端の黒部付近の段丘開析谷の右横ずれ屈曲、直線的な断層谷とそれを横断する方向の旧河川の右横ずれ屈曲が中山峠付近まで連続的に分布することから確実な活断層とした。

地震調査研究推進本部地震調査委員会(2004)では郷村断層帯を構成する断層は、仲禅寺断層、郷村断層、新治断層、上菅一長岡断層としている。

仲禅寺断層は、京丹後市網野町島津から同市峰山町丹波まで北西一南東に向かって直線状に延びる長さ約 6 km の左横ずれの変位を伴う断層である。島津南部において北北東に延びる箱形低地の西縁と沖積低地上に東落の低断層崖が 2 カ所認められる。それより南部は基本的に丘陵を開析する北東流下の小河川が系統的に左横ずれ屈曲していることから、確実な活断層とした。

郷村断層は、京丹後市網野町の沿岸から同市峰山町新治付近まで、ほぼ北北西一南南東方向に延びる長さ約 10 km の左横ずれを主体とし、南西側隆起(北東落)の変位を伴う断層である。1927 年の北丹後地震に伴う地震断層(岡田・松田, 1997)に沿って、中位段丘面および扇状地面に低断層崖(網野町高橋付近)の連続的な分布がみられ、またその南では、丘陵内河川の左横ずれ屈曲が系統的に分布することから、確実な活断層とした。

新治断層は、京丹後市峰山町赤坂付近から同市峰山町新治まで、ほぼ南北に延びる長さ約 3 km の左横ずれを主体とし、西側隆起(東落)の変位を伴う断層である。郷村断層とは異なり南北走向の東落ち低断層崖が山地と低地境界に認められ、かつ左横ずれ屈曲が北端部付近に認められたことから活断層と認定した。本断層の名称については、「近畿の活断層」(岡田・東郷編, 2000)において断層の南端部に延びる北丹後地震による地震断層を含め称されているが、本図では活断層の区間を新治断層とした。

上菅一長岡断層は、京丹後市上菅付近から同市峰山町長岡を經由して、同市大宮町善王寺付近まで北西一南東方向に延びる長さ約 2 km の全体的に西側隆起(東落)の変位を伴う断層である。鱒留川右岸の河成上位段丘面、中位段丘面の分布が突然途切れ、流路に直交する方向に崖地形が延びていることから、累積的な東落の縦ずれ断層が認められる。また、丘陵内のやせ尾根には鞍部地形が連続的に分布すること、また沖積低地内一カ所に低断層崖があることから活断層とした。本断層の名称については、「近畿の活断層」(岡田・東郷編, 2000)において断層の北端と南端部に延びる北丹後地震による地震断層を含め称されているが、本図では活断層の区間を上菅一長岡断層とした。

本図北東域には、伊根町菅野<sup>すがの</sup>から宮津市奥波見<sup>たいこやま</sup>に至る断層、太鼓山付近の断層などの推定活断層が分布する。

伊根町菅野から宮津市奥波見に至る断層は、大規模地すべりが発達する笹ヶ尾山<sup>ささがおやま</sup>周辺において、相対的に東落の山地高度不連続が南北に連続することから推定活断層とした。

太鼓山付近の断層については、太鼓山（スキー場）の西側斜面に山地高度不連続が南北に連続することから推定活断層としたが、地すべりの滑落崖の可能性もある。

本図北西域には、京丹後市弥栄町黒部<sup>ないき</sup>から峰山町内記<sup>くにひさ</sup>に至る断層、京丹後市弥栄町国久から掛津に至る断層などの推定活断層が分布する。

京丹後市弥栄町黒部から峰山町内記に至る断層には、北流する竹野川の右岸の段丘と山地の間に分布する丘陵内に、丘陵背面高度の不連続が東落（逆向き）で認められることから、南北に延びる縦ずれ断層と判断される。

京丹後市弥栄町国久<sup>くにひさ</sup>から掛津<sup>かけづ</sup>に至る断層では、中山断層の北側に併走する山地と段丘の境界をなすように、谷に沿って山地の連続的鞍部を連ねた場所に断層を推定した。なお、低地や段丘に流れ出す小河川にわずかな右横ずれの屈曲が認められる。

本図南西域には、京丹後市峰山町二箇<sup>にか</sup>から大宮町善王寺<sup>かみつねよし</sup>に至る断層、京丹後市大宮町口大野から大宮町下常吉<sup>おおなる</sup>に至る断層、京丹後市大宮町上常吉から大成に至る断層などの推定活断層が分布する。

京丹後市峰山町二箇から大宮町善王寺に至る断層は、山地内において鞍部を連ねたラインに系統的な左横ずれが数カ所認められることから、推定活断層とした。

京丹後市大宮町口大野から大宮町下常吉に至る断層では、山地内において鞍部を連ねたラインに系統的な東落の高度不連続が認められることから推定活断層とした。

また、京丹後市大宮町上常吉から大成に至る断層については、山地南麓斜面内において鞍部が比較的東西に連続することから、推定活断層としている。

（千葉大学教授 宮内崇裕）

## 引用文献

岡田篤正・松田時彦（1997）：1927年北丹後地震の地震断層。活断層研究，16，95-135。

岡田篤正・東郷正美編（2000）：「近畿の活断層」。東京大学出版会，408p。

活断層研究会編（1991）：「新編日本の活断層 - 分布図と資料 -」。東京大学出版会，437p。

地震調査研究推進本部地震調査委員会（2004）：山田断層帯の長期評価について。

[https://www.jishin.go.jp/main/chousa/katsudansou\\_pdf/74\\_yamada.pdf](https://www.jishin.go.jp/main/chousa/katsudansou_pdf/74_yamada.pdf)（2018年3月12日閲覧）